

觀海堂旧蔵老莊関係書物

——『老子虜齋口義』について——

王 廼

觀海堂蔵書は蔵書家楊守敬の蔵書のことである。楊氏は日本における『莊子注疏殘本（宋刊本）』『莊子南華眞經十卷（日本刊本）』『莊子郭注殘本三卷（古鈔卷子本）』などの莊子関係書物の書誌を『日本訪書志』に述べた^①。又、嘗て日本にある老莊関係書物を求めて中国へ持ち帰った。本論文は主に現在台北故宮博物院に所蔵されている觀海堂旧蔵老莊書物と、嘗て日本に存在していた老莊関係書物を調査し、特に、中にある『老子虜齋口義』の日本の室町末から江戸初期までの研究状況及び、その影響について論じるものである。

一、楊守敬及び觀海堂蔵書の経緯

『楊惺吾先生年譜』^②によると、楊守敬は清の道光十九（一八三九）年四月十五日に生まれ、諱は守敬、字は惺吾、湖北宜都の人。四歳で父親に死なれ、十一歳で勉強を止めて商売を学び、夜は書を読み、文を習った。十四才で県の試験に赴き、十三番目で合格し、同治元（一八六二）年二十四才の時、挙人に合格した。しかし、その後はたびたび受験しても合格できなかったが、上京の度、当時の学者と交友した。楊氏は地理、目錄、金石の学に精通し、それぞれ数十種の著述が世に伝わり、特に長年力を注いだ水經注は世に伝わっている。光

緒六年（一八八〇）、楊氏は四十二才で三月の会試に落ち、翌月何如璋の招きで駐日随員として日本に赴いた。⁽³⁾ 因みに、何氏は初代の駐日清国公使で日本の文人たちと深い交流があった。⁽⁴⁾ 当時、黄遵憲がちょうど大使館の参贊に着任している。「日本雜事詩」「漢籍保存詩」の黄遵憲の自注にあるように、黄氏は日本には珍しい唐鈔宋刻などの中国古籍が残っていると楊氏に告げたので、楊氏は日本訪書を行った。⁽⁵⁾

喬衍瑄の「日本訪書志叙録」⁽⁶⁾で述べているように、楊守敬が外交官として来日した時、丁度日本は明治維新の時だった。彼は懸命に毀損している版本を買い取り、一年足らずで三万余巻を集めた。黎庶昌の古逸叢書を編纂する際にも古書の収集に努め、或いは買い、或いは古今石刻文字などで交換した。又、求め得た書物の来歴を別紙に記し、二十余冊を得た。これが後日の『日本訪書志』である。中華民國四年、楊守敬の歿後、これらの書物は政府に売却されたが、日に連れて多く散逸した。民国七年、半分は松坡図書館に納め、残る部数は民国十五年に故宮博物院に納めた。後に、台湾の故宮博物院に運び、それが即ち現在所蔵の觀海堂旧本である。当時日本の日中兩國の老莊關係書物を含む経・史・子・集の旧抄本・古槧本・刊本の外に、医学書・朝鮮書籍も多く楊守敬によって中国や台湾に伝わった。

楊守敬の友人周錫恩には嘗て楊氏を訪ねた際、楊氏が鄰蘇園書樓を開けてその蔵書を見せた様子を詠った七言古詩がある。

楊侯飯我日向中、酷熱不酒顏皆紅。手開書樓導我坐、牙籤戢戢明雙瞳。寫本自唐印本宋、異寶來自扶桑

東。原注君使日本、得異書數千種。（後略）「周錫恩傳魯堂集卷一」

（楊侯我に飯はし、日、中に向んとす、酷熱に酒のまざるも顏皆紅し。手ずから書樓を開きて我を導きて坐らしめ、牙籤戢戢として雙瞳に明らけし。寫本唐自り印本は宋、異寶來るは扶桑の東自りす。原注に君日

本に使用し、異書数千種を得と。

その後、再び黄州に行き、楊守敬の鄰蘇園書樓に泊った時に残した詩「過黄州宿楊惺吾鄰蘇園書樓（黄州を過ぎりて楊惺吾の鄰蘇園書樓に宿る）」にも

宋槧唐雕三百架、獨專尤物時人罵。興來偃筆作狂書、行歌亂石荒花下。西山如客揖書樓、樓上老儒無所求、何須蹀躞金門道、得住高樓吾即休。〔周錫恩魯堂集卷三〕

（宋槧唐雕三百架、獨り尤物を専らにして時人に罵らる。興來りて筆を偃せ狂書を作り、行歌す亂石荒花の下。西山客の如く書樓に揖め、樓上の老儒求むる所無く、何ぞ金門道に蹀躞するを須いん、高樓に住み得れば吾即ち休す。）

とある。難解な詩であり、「西山如客」の意味は不明であるが、この二首の詩によって楊守敬が日本から持ち帰った日本の唐・宋の鈔本や槧本は、既に当時の文人たちの間に知られ、嫉妬の対象となったほどの異宝だったということが分った。

楊守敬の蔵書は後に政府に売却したが、売却した年月や金額は記載によって多少の食違がある。^②『觀海堂藏書研究』^⑧によれば、故宮博物院所藏觀海堂藏書は、資料によって、その数がまちまちである。(1) 周駿富の「中國圖書館簡史」に楊氏觀海堂藏書「一五九三部」と記し、(2) 莊亞文の「全國文化機關一覽」に「一六七一部、一五九一九冊」と記し、(3) 那志良の「故宮四十年」に抗戦初期は「六十二箱、一五五〇〇冊」、三十八（一九四九）年台湾に移った時は「五十八箱、一五五〇〇冊」と記し、(4) 吳哲夫「故宮善本舊籍圖書的典藏、維護及宣揚」に「共計一六六六部」と記し、(5) 趙飛鵬が調査した際、故宮博物院書庫係りの趙氏によれば、「一五四九一冊」であり、(6) 趙飛鵬が民国二十一年の「故宮所藏觀海堂書目」によって計算

した結果は「二九二四部」である。趙氏も述べているように、第二次世界大戦初期は「六十二箱、一五五〇〇冊」で、中華民國三十八年（一九四九）台湾に移った時「五十八箱、一五五〇〇冊」と箱数が異なるが、冊数が同じであるのは単に大箱に換えたからである。一体当時楊氏の蔵書が幾らあったかは不明のままである。何れにせよ、楊守敬が逝去してから戦乱を挟んで現在に至るまで、その蔵書がかなり紛失し、且つ余書は同一ヶ所に纏めて所蔵していないので、台北故宮博物院にある觀海堂蔵書は楊氏の蔵書の一部に過ぎない。従つて、楊氏所蔵だった老莊関係書物は現存した部数より多かつた可能性がある。

二、觀海堂旧蔵老莊関係書物

現在故宮博物院所蔵觀海堂旧蔵老莊に関する書物は以下のものが見られる。

- ① 道德指歸論六卷 二冊 旧題漢嚴遵撰 明胡震亨、毛晉同訂 明末刊
- ② 老子道德眞經二卷 二冊 魏王弼注 唐陸德明音義 日本宇恵考訂 日本明和七年江都書肆刊本
- ③ 老子虜齋口義二卷 二冊 宋林希逸撰 明初期刊
- ④ 老子虜齋口義二卷 一冊 宋林希逸撰 朝鮮旧刊
- ⑤ 老子翼三卷 三冊 明焦竑明萬曆十六年王元貞校刊本
- ⑥ 林子道德經釋略六卷 二冊 明林兆恩注 明萬曆十六年游天騏刊本
- ⑦ 老子道德經考異二卷 二冊 清畢沅撰 日本天保四年發弘書肆刊本
- ⑧ 莊子（存庚桑楚・外物・寓言）三篇 莊周撰 晉郭象注 日本江戸間影鈔高山寺蔵鎌倉鈔本
- ⑨ 纂圖互注南華眞經十卷 五冊 莊周撰 晉郭象注 唐陸德明音義 原麻沙刊本

- ⑩ 纂圖互注南華真經一卷 一冊 莊周撰 晉郭象注 唐陸德明音義 日本室町末近世初鈔本
- ⑪ 重刻莊子南華真經十卷 十冊 莊周撰 晉郭象注 日本服部元喬 千葉玄之補 日本天明三年江戸山崎金兵衛等刊本

⑫ 唐陸德明莊子音義三卷 一冊 唐陸德明撰 日本寛保元年東都鋪錦山房刊本

⑬ 郭注莊子覆玄十二卷 十二冊 杜多秀峰撰 日本文化元年任枝軒刊本

⑭ 莊子南華經雜篇一卷 一冊 莊周撰 明謝汝韶注 明崇徳書院刊本

⑮ 句解南華真經十卷附新添莊子十論一卷 十冊 宋林希逸撰 李志表撰附 日本慶長間活字本

⑯ 鏗南華真經三注大全存十九卷(二十二・二十一欠) 九冊 元陳懿典撰 明覆元余良木自新齋刊本

⑰ 莊子翼八卷 六冊 明焦竑明萬曆十六年王元貞刊本

以上、日本の刊本或いは鈔本は、②の宇恵考訂『老子道德真經』・⑦の日本天保四年發弘書肆刊の清畢沅撰『老子道德經』・⑧の日本江戸間影鈔高山寺蔵鎌倉鈔本『莊子』(庚桑楚・外物・寓言三篇)・⑩の日本室町末近世初鈔本『纂圖互注南華真經』・⑪の日本天明三年江戸山崎金兵衛刊服部元喬 千葉玄之補『重刻莊子南華真經』・⑫の日本寛保元年東都鋪錦山房刊『唐陸德明莊子音義』・⑬の日本文化元年任枝軒刊杜多秀峰撰『郭注莊子覆玄』・⑮の日本慶長間活字本『句解南華真經十卷附新添莊子十論一卷』の七本であることは一目瞭然である。外に注目すべきは、明初刊及び朝鮮旧刊の林希逸撰『老子虜齋口義』である。觀海堂旧蔵林希逸の口義注について、外にも下記の『列子』に関する書物が見られる。

列子虜齋口義二卷 二冊 宋林希逸撰 明刊本

列子虜齋口義二卷 二冊 宋林希逸撰 日本萬治二年刊本

林希逸には『老子虜齋口義』や『列子虜齋口義』があるのみならず、『莊子虜齋口義』もあり、これらは「三子口義」と称せられている。林希逸のことは既に室町時代に知られており、特に彼の『莊子虜齋口義』は既に日本の南北朝期に刊行されていた。¹⁰⁾

三、『老子虜齋口義』について

観海堂旧蔵の両『老子虜齋口義』は嘗て日本に存在していた。まず、明初期刊『老子虜齋口義』について言えば、これが即ち阿部隆一の『増訂中国訪書志』に著録されている明前期『老子虜齋口義』二巻二冊刊本である。書誌については正しく阿部氏の述べた通りで、外簽題は「老子經 上」と「老子經 下」、有界每半葉十行、每行十八字、口義注十七字、刻工名がある。¹¹⁾ 実際、この書物は上下二冊に互って文字の大きさが全て同一で、版心名があり、双黒魚尾であり、上巻は「老子虜齋口義發題」から「道常無為章第三十七」まで、下巻は「上徳不徳章第三十八」から「信言不美章第八十一」までである。見返しに楊守敬の画像があり、画像の右上及び左下にそれぞれ「星吾七十歳小像」の陽刻長方印及び「楊守敬」の陰刻方印がある。上巻巻首「老子虜齋口義發題」の下に「星吾海外訪得秘笈」の陽刻方印・「杉垣珍藏記」の陽刻長方印・「釋氏東澤」の陰刻方印が捺され、「釋氏東澤」の右に「宜都楊氏藏書記」の陰刻方印が捺されている。下巻巻首の巻題「老子虜齋口義下」の下に、「星吾海外訪得秘笈」の陽刻方印及び「杉垣珍藏記」の陽刻長方印が捺されている。

全二冊に互って眉上や下欄に室町期の書入れがあり、いま、理解の便宜を図るためそれぞれの書入れを各章に追って下記に列挙して置く。

老子虜齋口義發題

莊子齊物論ニ云萬世ノ之後而ニメ一タビ遇テ大聖ニ知ニ其解ラ者ハ是レ旦暮ニ遇レリ之ニ也

道可道章第一

傳灯録卅永嘉真覺大師證道歌之文

礼記礼運云、天秉陽、垂日星、地秉陰、竅於山川、陳澧注竅於山川、山澤通氣也

莊子齊物論

周易說卦云神也者妙萬物而為言者也

天下皆知章第二

上係辭、乾ハ知リ大始、坤ハ作成物云々

說命中篇

道冲章第四

般若心經云舍利子是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減

載營魄章第十

林子曰人始生日嬰

太上章第十七

礼記檀弓下云、有虞氏未施信於民、而民信之、夏后氏未施敬於民、而民敬之、殷人作誓、而民始畔、

周人作會、而民始疑

大道廢章第十八

林子曰、儒者言仁義即道ト者、以ナリ道ハ不レ越ヘ於仁義ヲ也、老子別仁義於道ト者、以ナリ

道大トスルヲ於仁義ヨリ也、文同メ而意異ナリ⁽¹²⁾

絶聖棄智章第十九

周礼注云、属猶合也聚也

絶學無憂章第二十

傳灯録卅永嘉真覺大師證道歌云、豁達空撥ニ曰果ヲ澆々蕩々招ニ殃禍一

孔德之容章第二十一

孟子尽心下篇

曲則全章第二十二

林子曰、夫惟不レ争、积氏ノ無諍三昧、而孔子ノ曰、君子無レ所争、由レ是觀レ之、不レ争之教ハ、三氏之
所レ同也⁽¹³⁾

跂者不立章第二十四

周易乾ノ卦ノ上九ノ象ニ曰亢龍有レ悔盈テハ不レ可レ久也

善行無轍迹章第二十七

莊子齊物論ニ云、滑稽之耀ハ、聖人之所ナリ凶ハカル也注ニ滑稽ハ、言ハ不レ分不レ曉也耀ハ、明也

知其雄章第二十八

莊子德充符云而シ況ヤ官ニシ天地一ヲ府ニス万物一ヲ注ニ官ニトハ天地一ヲ天ハ覆ヒ地ハ載ス天ハ生ジ

地ハ成ス各職ル其ノ職ニ而已

以道佐人主章第三十

好還

林子曰猶レ言_{下カ}出_ル乎_ニ尔_者ハ、反_{中ト}乎_{上ニ}尔_者⁽¹⁴⁾

周易蒙ノ卦象ニ曰山ノ下ニ出_ル泉蒙_{ナリ}君子以テ果_シ行_ラ育_ク徳_ヲ

夫佳兵章第三十一

林子曰東方盛徳在木主生也、西方盛徳在金主殺者也、故吉礼貴左、所以見其好生也、凶礼貴右所以見其惡殺也⁽¹⁵⁾

知人者智章第三十三

林子曰孔子所謂仁者壽、老子所謂死而不亡壽、釈氏所謂無量壽、三聖人者、其言虽異其意則同⁽¹⁶⁾
執大象章第三十五

林子曰大象者道也、無象之象是謂大象

昔之得一章第二十九

易ノ上係辞ニ云乾坤毀_{ルト}ハ則死_ニ以_テ見_ル「易_ヲ

莊子駢拇ノ篇ニ云非_スヤ乎_ニ而曾史_ハ是_レナリ己_ハ曾_ハ曾_子史_子魚_也

莊子則陽篇云容成氏曰除_レケバ日_ヲ無_レシ歳無_レハ内無_レシ外

上士聞道章第四十一

楊子法言君子篇云昔_シ乎顔淵_ハ以_レ退_ヲ為_レ進_ト、天下鮮_シ儷_タクイ、司馬光ノ註ニ云、顔回_ハ在_ニ陋巷_ニ不_ニ苟_キ仕_ヘ好_レテ学_ヲ不_レ倦_マ、是_レ以_レ退_ヲ為_レ進_ト

易上係辞ニ法象ハ莫_レ大_ニナルハ乎天地_ニ變通_ハ莫_レ大_ニ乎四時_{ヨリ}

此云後章者末八十一之詞也

名與身章第四十四

林子曰多猶重也

天下有道章第四十六

林子曰、昔者司馬季主有言、天不足西北、星辰西北移、地不滿東南、以海為地、夫天地且不足、而況人乎⁽¹⁷⁾

不出戶章第四十七

易上ノ係辭云唯神^{ナリ}也、故^ニ不^レ疾^{カラ}而速^{カニ}不^レ行^カ而至^ル

為學日益章第四十八

林子曰、何以謂之無為而無不為、中庸曰、至誠無息、周濂溪曰、誠無為、又曰、寂然不動者、誠也、蓋寂然不動之中、而有真不息者存也、何為之有⁽¹⁸⁾

大惠普曰下卷、答吊郎中書云、士大夫讀得書多底、無明愈多、讀得書少底、無明愈少

聖人無常心章第四十九

玉篇云慄徒煩切恐懼也盈也

出生入死章第五十

莊子大宗師篇^ニ云登^レ高^ニ不^レ懼^レ、入^レ水^ニ不^レ濡^サ、入^レ火^ニ不^レ熱^{トセ}

含德之厚章第五十五

玉篇腴、子雷切、赤子陰也、亦作峻、声類又作屢

嗑於亦切、咽也

嗑、所訝切、声破也

左傳僖公十六年云隕石^{アリ}于宋^ニ六鵠退^レ、周ノ内史叔興聘^ニ于宋、宋襄公問^レ焉、曰、是何^ノ祥^ツ也、吉凶焉^カ在^ニ

其政悶悶章第五十八

玉篇劇居衛反、利傷也

大國者下流章第六十一

黄茂材 宋淳熙間^ニ老子經ノ註造

道者萬物之奧章第六十二

韻會云落居也人所^ニ聚^リ居^一、故謂村落屯落院落聚落^ト

天下皆謂章第六十七

莊子齊物論云其^レ由寐^{スル}「ハ」魂也交^ル其^レ覺^{ルトキハ}也形^閑與^ニ接^テ為^レ構^ヲ日^ニ以^テ心^ヲ闔^{ハシム}

莊子外篇ノ達生ニ云、子列子問^ニ閔尹^一曰至人ハ^ハ潛行^メ不^レ窒^{フサカル}蹈^レ火^ヲ不^レ熱^{リセ}、行^ニ乎

万物之上^ニ而不^レ僇^レ、請問^フ何以^カ至^ニ於此^ニ閔尹^カ曰是純氣^ノ之守^レ也

民不畏死章第七十四

周礼^ニ有^ハ鼻^{ツミ}「奇裘^ニ」則相^イ及^ヌ裘^ハ音斜^不正也

人之生章第七十六

左傳僖公三十二年云爾墓^ノ之木拱矣^{ナテヒシ}注云合^レ手^ヲ日^レ拱^ト

信言不美章第八十一

莊子齊物論云、道ハ隱ニ於ク小成ニ言ハ隱ニ於ク榮華ニ

以上述べた書入れ、黄茂材という人物の説明以外は、『莊子』『周易』『傳燈録』『般若心経』『礼記』『周礼』『孟子』『楊子法言』『大惠禪師語録』『玉篇』『左傳』、そして「林子」即ち『林子道德經釋略』から引用したものである。その中で最も引用が多いのは、『莊子』と『林子道德經釋略』で、同じく十箇所ある。既述したように、両口義の關係は極めて密接であり、『老子虜齋口義』と『莊子虜齋口義』の解釈について、両者は切り離せないから、『莊子』が引用されているのは当然である。又、『林子道德經釋略』の引用は、『林子道德經釋略』の原文との異同が少なくないが、それが多用されているのは、この書入れの写入は『林子道德經釋略』が伝来してからのことだからである。つまり、『老子』研究に当たってこの明刊『老子虜齋口義』は遅くとも『林子道德經釋略』から引用した時までに既に利用されていたと認められる。

林子とは林兆恩のことであり、明、莆田の人。字は懋勛、号は龍江・子谷子。又、三教先生と称す。著には『林子全集』がある。⁽²⁰⁾『林子道德經釋略』には万曆十五年の林子の自序があり、前掲したように明萬曆十六年（一五八八）游天騏の刊本がある。

次に、朝鮮旧刊『老子虜齋口義』のことであるが、その書誌も『増訂中国訪書志』の著録と同じだが、興味深いことは林羅山の手校本である江戸初期写『老子虜齋口義』の文字の位置配列がこの朝鮮旧刊と全く同様である。いま、この両『老子虜齋口義』の書誌を次のように比較対照してみよう。

朝鮮旧刊『老子虜齋口義』	江戸初期写『老子虜齋口義』
刊本（二卷一冊）	写本（二卷一冊）
後補黒色表紙	「帝国圖書館藏」の浮文字のあるカーキ色表紙・縹色内表紙
二八・二×一七・三糎	二七×十九糎
首に林希逸の發題を冠し、巻首・第二行に「老子虜齋口義上／（低十一格）虜齋林希逸と題す	首に林希逸の發題を冠し、巻首・第二行に「老子虜齋口義上／（低十一格）虜齋林希逸と題す
双辺有界每半葉十一行、行二十一字、注小字双行	無辺無界每半葉十一行、行二十二字、注小字双行
版心黒口「老子上（下）（丁付）」	無し
版式稚拙で、所々墨釘があるが、朱引・朱点・墨訓なし	全体筆写で、朱引・朱点・墨訓があり、墨釘を補写
全て繁体漢字	所々異体字や簡体字

但し、江戸初期写『老子虜齋口義』には、下巻の巻末に林羅山の「老子口義跋」が附してあり、末尾に「元和戊午孟春吉日辰令 道春子」とある。異体字について、例えば、

漢↓漢 微↓微 問↓問 勞↓勞 書↓昏 數↓数 事↓亼 變↓変 盡↓尽 萬↓万（發題） 競↓競
 養↓養（三章） 發↓發（十八章） 處↓処（三十一章） 聞↓聞（三十三章） 辭↓辞（三十四章） 時↓吃（六十九章） 學↓学（七十六章）

などである。

朝鮮旧刊『老子虜齋口義』の墨釘は、江戸初期写『老子虜齋口義』の方が補写している。

小國寡民使有■伯人之器↓小國寡民使有什伯人之器

以求利也■有甲兵↓以求利也雖有甲兵

舍書契而用結■復於素朴也↓舍書契而用結繩復於素朴也（八十章）

善■也↓善純也

則無所容言又何■乎↓則無所容言又何辯乎

猶天道■虛↓猶天道然虛

但見有利而無害■有利之名↓但見有利而無害終有利之々名（八十一章）

江戸初期写『老子虜齋口義』は、以上に述べている数所以外、抄写上の原因で何箇所文字のずれがあるが、体的形式は朝鮮旧刊『老子虜齋口義』と全く同じである。つまり、単に巻首のみならず、本文の至る所の文字配列も全て同一である（末尾の書影参照）。従って、この林羅山の手校本である江戸初期写『老子虜齋口義』は、朝鮮旧刊『老子虜齋口義』になぞらえて抄写したものである。

結 語

楊守敬は一生集書・刻書に力を注いでいたが、その蔵書は彼が逝去してからかなり紛失した。彼の『鄰蘇老人年譜』に、寺西秀武が黎都督に楊氏の蔵書の保護を依頼した後、楊氏の家門に次のような告示が貼っていたと述べている。

照得文明各國、凡於本國之典章圖籍、罔不極意保存、以為國家光榮、茲查有楊紳守敬、藏古書數十萬卷、凡我同胞、均應竭力保護、如敢有意圖損毀及盜竊者、一經查覺、立即拿問治罪。楊紳係篤學老成之士、同胞咸當愛敬、共盡保護之責、以存古籍而重鄉賢²¹

（照得文明各國、凡そ本國の典章圖籍に於て、極意に保存し、以て國家の光榮と為さざるは罔し、茲查楊紳守

敬古書數十萬卷藏する有り、凡そ我が同胞、均しく應に力を竭して保護すべし、如し敢へて意に損毀及び盜竊を圖る者有らば、一たび査覺すれば、ただちに拿みて問ひて罪を治む。楊紳これ篤學老成の士たり、同胞みな當に愛敬し、共に保護の責を盡し、以て古籍を存して而して郷賢を重ずべし。

それにもかかわらず、楊守敬の蔵書は紛失して、その数を知ることさえできなくなったのである。

觀海堂旧蔵老莊関係書物を調査した結果、『列子』関係書物を除いて、日本の室町末近世初の抄本や江戸時代の刊本を含めて十七本ある。その内、明刊『老子虜齋口義』及び朝鮮旧刊『老子虜齋口義』は嘗て日本に存在していた。明刊『老子虜齋口義』に室町期の書入れはあるが、「林子曰」が頻繁に引用されているので、その書入れは林兆恩の『道德經釋略』が伝来してからのものであり、遅くとも室町末期まで既に『老子』研究に利用されていたと推定できる。又、国立公文書館所蔵の林羅山手校本である江戸初期写本は、觀海堂蔵朝鮮旧刊『老子虜齋口義』と、異体字・簡体字や些細な書写のずれを除いて書式のすべてが同一である。従って、林羅山のこの手校本『老子虜齋口義』は朝鮮旧刊本になぞらえたと断定できる。以上、觀海堂の旧蔵である明刊本にしる、朝鮮旧刊にしる、つまり、両『老子虜齋口義』は嘗て日本に存在していたのみならず、それぞれ日本の中世から近世にかけて、『老子』研究に当たってその役割をかなり果たしていたのである。

注

- (1) 楊守敬『日本訪書志』二廣文書局印行 中華民國五十六年八月。
- (2) 吳天任『楊惺吾先生年譜』藝文印書館 中華民國六十三年十一月初版。
- (3) 前掲1『日本訪書志』「訪書志序」。
- (4) 佐藤保「何如璋と日本——日本文人との交流——」『日本中国学会創立五十年記念論文集』汲古書院 平成十年十月発

行 頁五八一〜五九四。

(5) 钟叔河輯校『黄遵宪日本杂事诗广注』湖南人民出版社 一九八一年十月第一版第一次印刷 頁二二三

铁壁能逃劫火烧、金绳几缚锦囊苞

彩鸾诗韵公羊传、颇有唐人手笔钞

佛寺多以石室铁壁藏经、秘笈珍本、亦赖之以存。变法之初、唾弃汉学、以为无用、争出以易货、连檣捆载、贩之羊城。余到东京时、既稍加珍重、然唐钞宋刻、时复邂逅相遇。及杨惺吾广文来、余语以此事、并属其广为收辑、黎莼斋星使因有《古逸丛书》之举。此后则购取甚难矣。【按】原本无此首。

定本によつた実藤恵秀・豊田穰の訳である『日本雑事詩』は次のように訳している。

寺院は石室や鉄壁で経を所蔵するものが多い。秘笈珍本も、そのおかげで残った。維新のはじめ、漢籍を唾棄して、無用のものとなし、争って輸出し、毎船荷づくりして積み込んで、外国にうりはらった。わたしが東京にきたときは、もはやすこし珍重しかけていた。しかし唐鈔本や宋刊本には、ときたま出あうこともあった。楊惺吾(守敬)広文学士がきたときに、わたしはこのことをかたり、ひろく搜集することを依頼した。黎純齋(庶昌)公使は、これによつて古逸叢書を刊行した。

実藤恵秀・豊田穰訳『日本雑事詩』平凡社 昭和四十三年三月 頁一三三

(6) 前掲1『日本訪書志』『日本訪書志叙録』

(7) 前掲2『楊惺吾先生年譜』中華民國八年己未(一九一九)先生卒後四年の条にこうある。

先生之觀海堂藏書、以傳沅叔之介、鬻諸政府。本年總統徐菊人世昌以部分藏書撥交松坡圖書館、其餘儲於集靈魂、後又撥歸故宮博物院圖書館、公開閱覽。…(中略)…按袁氏序何澄一觀海堂書目、既稱先生藏書、以國幣三萬五千元鬻諸政府、而所撰先生小傳、則云七萬餘金、未知孰是。又徐總統以一部芸藏書、撥歸松坡圖書館、序稱在己未、即民國八年、而小傳則云七年冬、亦見歧異。

(8) 趙飛鵬『觀海堂藏書研究』漢美圖書有限公司 一九九一年七月初版

(9) 前掲8『觀海堂藏書研究』頁七六〜七八

- (10) 王 廸「室町時代における『莊子騰齋口義』」お茶の水女子大学中国文学会報第十九号 二〇〇〇年四月 頁一七～三二
- (11) 阿部隆一「増訂中国訪書志」汲古書院 昭和五十一年十一月発行 昭和五十八年増訂発行 頁二二八
- (12) 『林兆恩道德經釋略』無求備齋據明万曆年間刊林子全書本影印。
原文は次の通りである。

林子曰、儒者言仁義即道者、以道不越於仁義也、老子別仁義於道者、以道大於仁義也……(中略)……自經傳之言仁義、往往有文同而意異者。當各求其旨趣、不可以辭害意也。

- (13) 前掲12 『林兆恩道德經釋略』

「夫惟不爭」、原文は「惟其不自見不自伐不自矜也、則亦何争之有」となっている。

- (14) 前掲12 『林兆恩道德經釋略』原文は「好還猶言出乎爾者反乎爾者也」である。

- (15) 前掲12 『林兆恩道德經釋略』原文は「老子億。東方盛徳在木主生也、西方盛徳在金主殺者也、故吉礼貴左、所以見其好生也、凶礼貴右所以見其惡殺也」である。

- (16) 前掲12 『林兆恩道德經釋略』原文は「谿堂謝逸壽亭記曰。孔子所謂仁者壽、老子所謂死而不亡壽、釋氏所謂無量壽、三聖人者、其言雖異其意則同」である。

- (17) 前掲12 『林兆恩道德經釋略』原文は「昔者司馬季主有言」は「昔司馬季主有言」となり、「以海為地」は「以海為池」となっている。

- (18) 前掲12 『林兆恩道德經釋略』に「而有真不息者存也」は「而有真不息者在也」となっている。

- (19) 王 廸「從書誌考察日本の老莊研究狀況——以鎌倉・室町時代為主」『漢學研究』第十八卷第一期 漢學研究中心 中華民國八十九年六月出版 五十二頁

- (20) 黄宗義『南雷集』南雷文案卷九「林三教傳已酉」(四部叢刊『南雷文案』東洋文庫所蔵)

- (21) 楊守敬『鄰蘇老人年譜』近代中国史料叢刊第七十六輯 沈雲龍主編 文海出版社

附記：本論文は平成十二年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

信言不美 美言不信 善者不辯 辯者不善 知者不誨 誨者不知 聖人不積 既以為人己愈有 既以與人己愈多 天之道利而不害 聖人之道為而不爭 其之謂也

信言不美 美言不信 善者不辯 辯者不善 知者不誨 誨者不知 聖人不積 既以為人己愈有 既以與人己愈多 天之道利而不害 聖人之道為而不爭 其之謂也

老子原書口義下

老子原書口義下

老子性李氏名耳也其耳後無輔故曰無輔

西晉人何遜曰老子史高周平王時生末子年三

周禮於其言者見於此於末子前一葉推

述尚不詳無比於我老則末史公謂末子所疑亦

非過也及末子後復百二十九年周大史傳書只

樂於本吉頌合之教或以信即老十則七信子即同云

傳者然云周宣既後老子西歸特出辭開今平書上

為異人街一第會遊高上十萬五千餘言而去其上

蓋之中准有言教亦稱撰錄上十然可上本分為八